Title	社会学の時代
Sub Title	
Author	Small, Albion Woodbury(Fukuda, Mitsuhiro) 福田, 光弘
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2002
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.55 (2002.) ,p.83- 92
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	翻訳
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000055-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社会学の時代

アルビオン・ウッドベリー・スモール

Albion Woodbury Small

福 田 光 弘*訳

Mitsuhiro Fukuda

社会学の第一の場所とは、近代の人々の思考の中にある。私たちはこのことを認めるにせよ残念がるにせよ、この事実から逃れることはできない。これに関連する二、三の事柄の検証はこの雑誌の目的を正確に述べることになるであろう。

I. 私たちの時代では人々の結社 (*human association*) は、先行するいかなる時代よりも目立つものであり、そして影響力のあるものとなっている。近代の人々は自分たちに先行する世代の人々より多くの点で、自らの運命が自分以外の人々の存在に影響を受けているということに気づいている。採取産業に従事する労働者の数が少なくなり、それに比例して生産や消費の媒介過程に占める労働者の数が増えているところではどこでも、人間存在の条件における物理的・社会的な要素のもつ相対的な重要度についての人々の考えに、変化をもたらさないとしたら、それは驚きである。産業が多様化し、分業と競争が地域化されると同時に国際化され、個人的にも職業的にも遠隔地にいる人々による影響を被り、コミュニケーションが地理的には分離されてはいるが、産業としては関係付けられた集団の間で、正確かつ迅速なものになっている。こうした変化により人々の思考にとって、物質的条件に従属せざるをえないとする見方は、支配的な要因とはみなされなくなった。人間が自ら作り出した脈絡に従属していることを理解することや、人と人との結びつきによりえられる利益を知るとは、決定的に重要なことになっている。

モンタナの農場主は家畜の群をうまく越冬させることができても、イリノイの加工業者が石炭の荷揚げ人足や機械工や大工について知らなければ、家畜を市場へ送り出すことはできない。ネヴァダの鉱山師は、ある立法行為と自分のもっている銀の価値が下がっていることに、一致を見いだそうとする。ペンシルヴァニアの圧延機工員は、ワシントンの一団の人々が、彼の仕事や賃金の増減について決を採っているであろうことを発見する。——これら全てのことは、人々の関係上で固定された様々な要因が無視されていることを知らしめる。そして人生のゲームの中で出会う他のプレーヤーたちを、単にチェス盤で向かい合う相手であったり、フットボール場や野球場でのライバルチームとしかみなさなくなる。

このような影響を通して、人々の結社について真相は、哲学者たちがその重要性を知り始めるずっと

* 慶應義塾大学大学院博士課程

前に、大多数の人々にとって非常に身近な現実となる。

II. 私たちの時代に際だった精神的特徴とは、*規律化されていない社会的な自己意識*である。人々は以前より、互いを明確にそして多様なかたちで意識するようになった。そして人々は互いの存在によって、ひどく混乱させられるようになってきている。私たちは時に自分の世代では、自分たちが互いに同胞であると感じ合っていると信じている。しかし通常の意識内容は、より正確に「互いに干渉し合っている」とされている。われわれ人間種にとり、人がもっともやっかいな動物であるとみなす社会的接触について、私たちは十分すぎるほど知っている。その目的や行動がどのようなものであれ、人々が何らかの企てをすることは不可能であるかのようだ。なぜならそうした企てが他の人々がもつであろう先入観、物欲または目標に衝突しないことは滅多にないためである。私たちの闘争に常についてまわる、または私たちの思いに反することにもなる運命とは、もはや自然の威力ではなく、超人的な擁護者(champion)でもない。運命とは単に、私情を脱し同盟関係に入った人々の意志である。近代の人々が唱える社会的紐帯に関する理論がどのようなものであれ、この紐帯が存在することについて、誰も決定的な証拠をもっていないのである。

III. 人と人との不可避的な接触は、人々の結社について、*独断的な通念上の哲学*を作り出した。社会的な自我意識は、模範的な条件、または支配的なドグマとして定式化される。近代人は同国人と異国人、公務員と民間人、俸給生活者と雇用者、資本家や地主と賃借人、組合に加入した労働者と未加入の労働者、頭脳労働者と肉体労働者、産業労働者と犯罪従事者、金持ちと雇用を求める貧しい人々や雇用されることを忌避する者たちとのさまざまな接触について、ただ知っているだけではない。全ての地位または身分の人々が、これらの接触について思いを巡らし、これらの接触に関する議論に耳をかたむけ、意見を入手し、何らかの信念をもつようになってきている。

印刷技術の発明以前には、ある一人の特別な人間が、様々な社会的関係に広範な影響を与えていた。一八世紀の最後の四半世紀には社会哲学は哲学の様々な学派から抜け出し、ある国では腐敗した王朝を破壊するほど、一般世間の強い支持をえた。一九世紀の最後の十年間で、文明化の進んだ主要国には、読み書きのできない人はごく僅かとなった。そして読み書きのできる全人口が、なお読み書きのできない多数の人とともに、絶え間なく話し合いを行い、社会学の学園(lyceum)を維持している。もし僅かでも学習することが危険なことであるのなら、こうした社会学の学園を源にする危険は、今日では普遍的なものになっている。数百万の人々が社会的関係についての断片的な知識をもっており、彼らはこうした貧弱な知識を、社会的教義や社会政策へと変えていこうとしている。現状において特有な危険の要素は、このように示された。近代的な思考は、合意により決められた要素を、人間の条件の中で固定化された要素より、重要なものとしている。社会とは人々が選び取ったものであるという、輝かしいが反面的な真実に夢中となることが、今のところ通念である。今日では、無限の形態をもつ通念上の社会哲学が、様々な人間の限界を正当に見積もることなく、制度上の再編について思弁を巡らすことに合意している。

IV. 今日、*通念上の社会哲学*は、*社会的趨勢*や社会「運動」に、その対応物を持っている。こうした社会傾向・動向は、同時代の様々な社会的条件についての省察により生み育まれた、一連の共感や条件

である。この動向の中で、何らかの人間の運命にとって究極的な決定因が出現したが、こうした深遠な力をもたらす作用は、変化に富み一貫性がない。というのも、それらの力が、それを信じる者にとっても異議を唱える者にとっても同様に、今のところ謎に満ちているためである。この動向は、私たちが先に述べた危険についての全ての要素を、将来期待される要素と結びつける。このことは最近、グラハム・テイラー (Graham Taylor) 教授により述べられている。彼の力強い言葉は、私たちの今まで論じてきた考え方は若干異なるけれども、ここで引用してみよう。

今日の社会学的な運動が何であるかを知的に評価することによってのみ、人々は教会がその動向に何を期待しているのか推測する資格をもつことになる。それは、最近の文献の表現に見出される一部や全体の形式や疑問に対して簡単でより限定的な答えを受け入れようとする努力である。唱道者 (claimant) であろうと批評家であろうと、この問題について、単なる著作の類や、二、三の指導者の説く思想・行動についての理想や、ある何らかの学派に属する思想家たちの版權に守られた心情の吐露や、単にある何らかの作品の方法や、または流行上の気まぐれなどとみなしてしまう人は、この動向を完全に誤解してしまう。そしてこの動向と教会との何らかの本質的な関係が、キリスト教精神という共通した土俵では重要なものであると考えることができなくなる。

以上の関係が、近代の生活における社会的動向にほかならないとする確信が、この議論の基礎となり、この議論が提示するものを保証する。まさにこの関係こそ、今日の生が推移する方向であり、実のところ「主導者」たちもこの方向へと遅ればせながらつきしたがっているのである。これは人間の営為 (affairs) が推移していく方角である。そしてその前進を計る尺度となる、明らかに社会学的な著作がないときには、この方角を辿ることになろう。これが一人一人の存在の多くに、そして互いに成員である全ての人と一人一人との関係の多くに、新たに生まれてきた意識である。この意識は神に由来するものであり、そして人が望むか否かにかかわらず「如何なる者も独立して生きることはできない」という時代に由来するものである。人々の精神に共有されたこの動向が、近代社会における人と人との複雑な関係を理解させ、ともに生き働くための知恵と技術 (science and art) を鍛え上げる。人々の心に共有されたこの動向が、社会的公正と人間の友愛 (brotherhood) への不滅の希望を実現する。人々の意志に共有されたこの動向が、阻害を受けた関係や切り離された階級へ、何らかの調整手段をもたらす適用する。そしてこの動向は近代産業システムという、福音を除いては、人間の営為にむけられたもっとも革命的な力に、起因するのである。

昨今の社会学上の動向は、以上のこと全てやそれ以上のことを象徴するものであり、教会との関係では特にそうである。しかし社会学の知 (science) は、データと科学的調査の学問としての範囲を、急速に定式化している。その範囲は全体として、社会の研究へ厳密に限界付けられている。そして社会科学は、いくつかの社会的構造が生み出したある特定の階級や条件の中で、人々がともに生き働くための実践的な技術に根拠を与えている。しかしこうした新しい知が、この動向の永続性や進歩や力についての重大な自己表現であり、そして絶対的に本質的なものである間は、新しい知はこの動向から独立したのもでも、この動向を包括的にとらえるものでもない。なぜならこの生活上の動向は、それを定式化しようとする最良の努力にまで浸透してしまったため、この動向を定式化への努力に還元することは、ほとんど馬鹿げたことであるからだ。この動向を観察する者はいても、それを証拠立てるものはない。解釈する者はいても、どんな思想も行動もその主導者を持たない。これは強力な「時代精神」(Zeitgeist) であり、

全ての生ある者の精神である。このことには、我が主が聖霊について、嘘偽りなく恭しくも記されたことが宛てられよう。「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこに行くかを知らない」。こうした動向に直面して、宗教的精神と科学的態度のみが尊重するに値するのである。

私たちの時代に世間一般にひろがっているこの奇妙な不安は、社会哲学における二つの仮定に対応している。そして今日、先例のないほど多くの人々がこの仮定を、あらゆる形式または力において抱いている。その仮定の第一は、人と人との関係は以前にあったものとは違っているということである。第二は、不正をただすために何事かが直接的、体系的、そして大規模になされなければならないということである。

したがって、私たちの社会構造を改造しようとする通念上で流布する煽動や、その論理上の原型である、社会についての通念的に流布している哲学が、概して学究(academic)の取り扱う事実ではないということや、さらにこうした哲学が全体的には学者の影響力の範囲よりも広範なものであることを指摘する。そのことにより私たちは、ほとんどの理論家たちが正当に考慮してこなかった以上の状況にたいし注意を呼びかけるのである。学者は通俗的な社会学と科学的な社会学の関係を、混迷が生じる以前に心に留めなくてはならない。要するに、社会学の職業的研究者たちには多くのことが課され、賭けられているのである。

多くの観察者たちは、社会学がもともと大学から生まれたものではないとから注意から逸してきた。現在の社会の諸形態を説明し、そして社会的条件を効果的に変化させるために都合がよい社会の諸形態を定めようとする世間一般の試みは、それが四季の変化と関係がないのと同じくらいに、大学とは切り離されたものである。いくらかの学者たちは未だに、社会学とは形式と空隙を、未来永劫もつことはないと考えている。なぜなら事物の本性は、社会学に制限規定を加えず、よって社会学という名称は、新たな理論を唱えるものたちに居場所を与えるための、単なる手段でしかないためである。こうした考えをもつ人々は、昨今の世間一般の人々の考えに底流するものについてほとんど何も知らないのである。自分とその共同研究者が、科学上の新たな主題の発見に従事していると考える、あまりに未熟な社会学者は、普通の人たちが絶え間なく提起している、様々な社会についての目をひく問題に答えるための手段を、完成させようとしている。彼らは世間一般の好奇心を作り上げるのではなく代表しようとしている。生は学界においてより生活者にとって、より切迫したものである。それゆえに、生活者たちは何らかの思考や観察のための道具を持つや否や、学者たちが提起するよりも死活にかかわる問題に取り組みはじめる。かくして社会哲学は世間一般に知られた題材を扱い、部分的な内容しかないが、政治的な影響力を持つことで、経験と常識に基づいて自ら説明していると主張する社会状態について、科学者たちが知る前に、評判を得ることになった。職業的社会学者の教義とは、通念上の知が作り出す社会学という性急な第一の思考(first thoughts)を、改定された第二の思考(second thoughts)によって置き換えようと試みることである。第一の思考とは学界の外にある人々が口にする印象なのである。

V. このように素描してきた事柄は、今まで承認されてきた社会哲学にたいし、困難な要求をもたらすことになる。現実的かつ可能的な社会的条件にたいする態度として、人々は全体として正気であるのか、それともヒステリー的であるのか、それとも偏執的でさえあるのか。私たちが社会にたいして内省

するときに前提としているものは適正であるのかそうではないのか。様々な現在の条件に先立つものや、こうした条件を判断する様々な公準や、目指すことが合理的である未来についての様々な条件のタイプや、今までとは異なる社会的秩序を創造するために人が自由に使うことのできる手段について、私たちは知りうる全てのことを学んできたのであろうか。もしあらゆる適切な科学的制限規定によって公認された、非常に根源的で詳細であり包括的な社会哲学をうち立てることができないなら、今日世間で教師の役目を果たしている多くの人々は、刺激のかつ煽動的な社会学的独断主義により、自分たちの周りの人々を由々しくも背いていることになる。福祉を大幅に促進させることのできる信頼性の高いプログラムがありうるという以前に、科学が様々な人間の福祉の条件について、適切な調査と形式がなくてはならないと主張するとき、科学は全ての人間の関心を鑑みることで、人々に共通の根拠 (common cause) を見いださなくてはならない。私たちの世代が引き継いだ制度はあまりに未完成なものであるかもしれないが、長い時間の中での知恵と美德の積み重なりであり、無知と邪悪にたいする反発のたまものである。こうした制度を整備し直そうとする者は、まず初めに制度を理解しなくてはならない。

ハーバート・スペンサー氏は、最近彼の書いた非常に重要な本の最終章で、次のように語っている。

絶え間ない変化のなかで、慈愛の精神 (Humanity) が進化していくことを期待する者が僅かばかりいる。慈愛の精神は、生にとり必須なものへと適合させられてきた。彼らのもつこの信念とともに、さらなる進化にたいして非常に多くの欲望が生じた。……それ以後、慈善心にとりもっとも高邁な野望は、神の写しとしての人間 (Man) を作り出すことに尽力したいというものとなる。完全に利他的な目的を追求するという、普通では考えられないような関心が生じるのを、折に触れて経験するであろう。そして時が経てば、その利他的な目的が慈愛の精神をさらに進化させると考える人々がさらに増えていくことになる。

人々の福祉の恒常的な拡大は断片的なことではなく、より優れた人間性 (manhood) の発展に依存する獲得物であり、それはより良い協同を可能にする。それゆえに、人々の福祉のさらなる拡大という目的にもっとも直接的に向けられるプログラムは、想像力の激発を抑圧するものであり、いま考察されている社会秩序に代わりうるものであるということを、私たちは肝に銘じなければならない。

VI. 多くの有能な学者たちがこうした条件の中に、独特な形式をもつ事業が要請されていることを認め始めている。この論文は過去の学問 (scholarship) の価値を落とそうとするものではない。学問の輝かしき専門化のおかげで、私たちが以前に用いていたよりも多くの知識を蓄積するようになった。学問の連合体が形成され、それが福祉を促進する手段となり、社会的目的に必要な知識の分業がもたらした生産物を、結合させ適用に供することになる。今まで無意識的かつ偶然的であったものは、今後は組織的に着手されることになる。分析的で微視的な学問は、微細な事柄を一貫した構造に組み込むことのできる、総合的な学者による補助的な作業がなければ、失敗に終わってしまう。人々が結社する条件はあまりに複雑に絡み合っているのも、もし私たちが過去と現在の人々の結社に直接関係のある、あらゆる利用可能な事柄を、一般化された知識へと還元してこなかったなら、人間の改善の進捗を速めるプランを理論化することにより、現在の世間一般の神經過敏と苛立ちを増加させるのはもはや許し難いことである。この一般化された知識とは、改善への方向と手段を示すものなのである。

この新たなる学問の課題は、人々の思考が解き放たれたあらゆる世界において認められることになってきた。学者たちはいたるところで、自らの社会についての知識が断片的であることについての不満と、徹底して動的であろうとする知識へと貢献しようとする望みを語っている。ベンジャミン・キッド氏 (Mr. Benjamin Kidd) による最近のイギリスにおける社会科学の状態についての報告は、啓発的な革命がいたるところで広がっている状態に対する正当な指針となっている。私たちは彼の言葉を長く引用するが、それは彼のことばが、実質的に私たちと大きな違いがないためである。キッド氏は以下のように述べている。

私が『社会進化』を書き始めたとき、今日の社会に生きる人を扱う科学 (sciences) では、実践的な科学者 (practical scientist) と実験を重んじる科学者 (experimental scientist) を比べると、あまりに対照的であることに心を打たれた。このことは、私たちの社会に生起する現象を研究する多くの人々が、私より前に気が付いたことであると思う。実験を重んじる科学者の勢いと活発さや、この五十年間に彼らに知られることになった新たなる生について、言うべきことはない。こうしたことは全て、単になるようにしかならなかったことである。驚くべきことはこの対照である。私が抱き始めたこの印象は、今に至るまでさらに深化し、より根底的なものとなっているといわざるをえない。実験を重んじる観察者にとってなじみ深いことは、研究者 (worker) が多かれ少なかれどれほど自らの専門的な思考から離れていようとも、一つの小さな研究者集団の他に、実のところ今日の英国ではいかなる学派も、全体としての人間社会についての科学を扱うことに適した人々を養成する方法をもっていないということである。このことについては当座の間、どれほど実験を重んじる観察者たちが拒否しようと試みても無駄である。この意見が、問題となっている多くの知的分野で表明された学識 (learning) や、そこで行われる熱心で苦勞の多い作業をけなす意図で用いられるのなら、それは私にとっては不本意なことである。私の意図することはそうではない。私が不満に思うのは、これらの知的分野における作業が互いに孤立しており、そしてこれらの知的分野が拠って立つ科学からも切り離されているということである。ありとあらゆるそれほど系統だっていない知 (lower sciences) は、いたるところで生と結びついていることが見られる。この生との結びつきにより、いたるところで様々な知は混ざり合い、それぞれの厳格な線引きがほとんど不可能になってしまっている。それにたいし、知識の上位の部門 (higher branches of knowledge) では、以上のことはどこにも見られない。多くの研究者たちは、かなり昔にどこかに消え去ってしまった観念の世界に未だに生きている。世界がどのように変化したかということについて全く考えることもなく、ある者などは自分たちとは関係のない知については何も知らず、さらには何も知りたくないということを、私たちに話したがっているようすらある。

私たちは今まで、長年に及ぶ知の歴史について伝え聞いてきた。そして多くの熱心で教養のある研究者たちが、歴史を正当に運命付けられた威厳ある地位へと至らしめる困難な努力の一翼を担ってきた。それにもかかわらず、研究者たちはそれほど系統だっていない知のもつ正確な方法と真理探究の精神に慣らされ、こうした知が自らに強くのしかけてくる普遍的法則の支配という感覚に囚われている。それゆえに彼らが、自らの知の領域における知識のこんがらがった糸を解こうとするときほどに、絶望的な光景はない。大学や学識の中心となるところでは、今までに知が何らかの法則を持ちえたかどうか、さらに、知は事実によって根拠を置かれるべきかそれとも絵空事 (romance) によって根拠を置かれるべきかを、未だに議論している知の提唱者 (exponents) たちがいることに、研究者は気が付くであろう。そ

の研究者に本棚から歴史の本を取り出させ、私たちの西洋文明に開かれた偉大なる生の過程に底流しそれを支配している自然の法則や、または私たちと同時代や私たちに先立つ西洋以外の社会システムの発展を導いてきた自然の法則についての、系統だった (scientific) 筋道を見いだすよう努力させよう。彼は多分何も見つけられないだろう。この筋道を因果関係に照らして議論しようという試みがあったとしても、知が西洋以外の地でとった方法をしめすことはできないであろう。彼に『スペクテター』誌のような教養のある意見を生産する、代表的な世論発表機関誌を手にとらせれば、最近の巻号に歴史的記述を行う評論を見いだすであろう。それらは「世界は卑しむべきものと考え、自分自身が何も知らない世界を浄化しようとする」僅かばかりの無知な人について言及したり、世界があまりに変化してしまったので、今日では自らが為すことや考えることの与える影響を「全人類 (mankind) の行動と指導原理を制限している」という事実と結びつけて言及している。そしてその結びつきは、一種のかすかな不安を思い起こさせるものである。彼はこの評論が「菩提樹の下に座禅を組み、魚のように愚かな褐色の人々に説教を行う半裸の修行僧が、今日という日は人類の三分の一の心に味気ないものを残すのみであると考えている光景」に心を打たれていることに気が付くであろう。「癩癩持ちのラクダ乗りが、一月もの間アラビアの山の中をさまよい、様々な思想を抱いてラクダから降りた。その思想は良かれ悪しかれあまりに強烈なもので、砂漠の民を強固な同胞関係へと結びつけ、彼ら戦士の民を、現存する世界でもっとも重要な組織を踏みじめるよう駆り立てる」ということにも、この評論が同じくらい心を打たれていることがわかるであろう。しかし彼はいかなる説明も見いだせない。評論は、全てが「歴史の絵空事」の一部でしかないということしか、私たちに語りかけはしない。しかし、これは評論家の決まり文句である。彼らは全ての歴史の絵空事に底流する何らかの法則を確信することで、明らかに感動しているのである。しかし評論家は、この科学の世紀の最後の十年間に、私たち科学者と相携わるべきことを何ももっていない。

公明正大な観察者は、自ら自然に共感を覚える党派—歴史を絵空事にすることに反対であり、現在では様々な時代についての徹底的な研究に従事している党派—に赴いてさえも、全体としては満足以上のものを見いだせない。この党派の努力は、分類と抽象を行う人たちの学派を確立することへと向けられているようである。この党派の目的の限界は、現存する全ての利用可能な資料を出版し、私たちの知識の源にたいし確実性を保証することにあるようだ。非常に有効で必要性の高い作品を貶めるために画一的な言葉を述べることは、科学精神にたいする何の忠実さにもならない。しかし私たちは、この精神的枠組みだけがつねに、歴史の科学を作り上げることができるとするものも間違っている。また、未出版の草稿の残りや、未だ踏査されていない情報源を——それがどんなに貴重なものであらうと——掃してしまうことで、私たちが歴史の知識の基礎を広げることができ、それにより科学として相応な厳粛さを歴史に与えることができるという希望をもつように装うことも、また間違っている。

歴史がいま待ち望んでいるのは、分類と抽象を行う人たちだけではない。いま歴史家のもっている手法に、比較科学の方法を習得した研究者たちの手法を加えることが待ち望まれている。彼らは歴史を、生の進化の中で最後の複雑だが秩序だった局面であると捉えることを可能とするために必要な手立てを持っている。こうした研究者のみが莫大な知識の集積を、様々な人間と歴史についての問題を解明するために利用することが期待できるのだ。この知識の集積に、歴史がその基礎をおいている多くの知が、今まさに貢献しようとしているのである。

誰か公正な精神をもつ歴史家と研究者のどちらかの意見に組みすことのない人が、どのように社会

科学全般を見わたすことができ、そして歴史的には全体として両者とも同じ状態にあるということを認めなくてもよいかを考えるのは、簡単なことではない。経済科学によって私たちの時代に提示された状況よりも、顕著なものを思い浮かべることが難しい。私たちはこの三十年の間に、一人の研究者により提唱された、経済概念に基づく社会発展の理論をもつこととなった。彼は経済科学において公認された提唱者の位階の正に外にいた。私はマルクスの近代社会への見方について言及しているのであり、それは剰余価値をもとにした理論である。それは完全に釣り合いを失った見方であり、単なる部分的な真実であることに間違いはない。そして人間社会の行動様式と、彼が考えた以上に大きな現存する進化への力についての無知を、あらゆる点で明らかにしている。それゆえに彼の見方は今後の社会の科学の中では何らかの突出した地位を与えられることはまずない。しかし奇妙に思われるかもしれないが、私たち西洋文明に限れば、現在マルクスの一般論がもたらした影響を、自らの著作に直接・間接に感ぜずにいる経済学の教授は、どの大学にもほとんどいないのである。未だに経済学者から拒否されているが、マルクスの影響はますます大きくなっている。しかしそれよりも私は強く思うのであるが、最近の一人の社会主義者の書き手（『学生のためのマルクス (The Student's Marx)』の著者であるエドワード・エイヴェリング博士 (Dr. Edward Aveling)）が、一九世紀の思想に影響をもたらしたという点で、ダーウィンと唯一並ぶ地位にマルクスをおいたことは、彼の地位を過大に評価したためではない。それではどこにマルクスの一般論が、その誤りにもかかわらず、隠れた影響を持つのだろうか。率直に言って、私は次の点にあると考える。彼は明白で大部分は真実である歴史的かつ人間的な関係形式についての所説、自らの社会についての理論を基づかせることに成功したのだ。そしてこの関係形式は、生の歴史全体に自らを投影してきたのである。彼の著作は人間社会に特有な要因について意を払わないが、しかしこうした要因こそがこの関係形式を支配し規制付けているのである。それにもかかわらず、経済学者が理解しようと注意を向けるよりも広い意味で、人間社会にはたらいっている自然の法則について、マルクスが不完全ながら獲得した見方が与えた影響は、彼を批判する者たちをはるかに凌駕するものであった。それゆえに、彼の理論がもつ政治的そして社会的な力は、単なる経済学上の立場にある狭いサークルの中で彼の理論を扱おうとする人々の批判によっては、ほとんど影響を受けないままになっている。このことは、社会が説明通りに変化しなくてはならないと考えたのは経済学者だけであるということにも伺える。現在の知識の状態では、マルクスの提起したものを除いて、広い意味での社会の科学はどこにも存在しない。そしてこのマルクスの提起した社会の科学が、私たちの時代のいかなる著作にも書き留められている一種の苦悩の中で取り組んだ様々な問題について、助けと導きを世界にもたらすことができるのであろう。

歴史学と経済学から職業的哲学へと目を向けても、ただ同じ教訓が繰り返されるのを知るのみである。ハーバート・スペンサー氏の統合的なシステム——それは学界における専門的な学問とはかけ離れ、ほとんど独立しているこの著者により、徐々に苦勞しながら組み立てられた（そして恐らく、システムそれ自体を害するまでに）巨大な構成物である——の外で、英国における哲学の提唱者たちは、それほど系統だっていない知の進歩によりもたらされる知識の流入によってはほとんど影響されない古い思考の世界に安住している。彼らの内の大半は、自分たちの世界の外で何がなされているかということについてさえも気にかけていない。私たちの時代における全ての現実的な作業の出発点は、生の全領域が自然の法則と一致し連続性をもつと知覚することである。こうした時代には、人々すなわち自らの受けもつ知識についての権威となる人々を見いだすという光景ほど、心を打つものはない。彼らはいかな

る現実的な道具もなく、自らの課題を導く科学についてほとんど何も知らない。そしてまた、現在の世帯にあたる人々が生きている間にこうした知がこの自らの課題にたいしてもたらず貢献の、測り知れない、革命的ですらある重要性についても、ほとんど何も知らない。しかし、彼らは人間存在についての様々な問題を議論し、そして人間性の究極的な原理を形成するという自らの課題に向かって努力しようと試みる。過去のもっとも実り少なき時代でも、このような立場をとることは悲惨なものであっただろう。そのことについて、ハクスリー (Huxley) 教授は哲学の歴史の中にもこれ以上に明確かつ断固たる教訓はないであろう言葉を残している。それによると「最近の哲学者は言うに及ばず、デカルトやスピノザやカントなどの哲学に最も重要で決定的なものを付け加えてきた人々は、物理科学の精神を深く浸透されてきた人々である。いくらかの人々、例えばデカルトやカントなどは、物理科学の詳細についても非常に良く親しんできた。実のところ、実験室とは哲学の殿堂の前庭であるのだ。そしてこの殿堂に捧げものを奉り聖別を受けない者は、聖域にいたる許しをえることはない」。そして以上のことは、哲学が根拠をおいた過去のこれら科学知について正しいものであったのなら、これら科学知が知識の源になり、人間の思考の正に基礎となるものを変容させ再構築している私たちの時代では、なおさら正しいことになろう。

VII. もし私たちが自らを偽ることなく述べれば、世界中の学者はアメリカの学者ほど、どんな専門的な知識もより広範な知識の連関へと従属していることに、気が付いていないと言えよう。自らが扱う特有な題材の内容に左右されないような、様々な専門科学の代表となるようなものはどこにもない。自らがもつ専門的な知識を、専門の垣根を超えた現実のある部分や局面に調整させることにより一般化させる、という望みを持たない学者はいない。このアメリカ的な傾向の特徴は、確固であると同時に困難な性質をもつ明確に分けられた思考領域として、社会学を分化させた。アメリカの学者の中には、社会科学のそれぞれの領域で、自らの専門的な調査と、その調査結果を他の調査結果と建設的に結びつけることの両方で成功を収め、人々に影響力を与えるような指導的立場にある人がいる。彼らは社会学の方法を洗練させてきた。しかし彼らはまだ、自分の仕事を社会学とは別の呼び名で区別されることを好むかもしれない。

アメリカでうまく運営されている専門の社会科学の雑誌は、ほとんど全ての巻で重要な論文を出版している。それらの論文の扱う主題は、専門となる社会科学の枠をはるかに超える議論である。アメリカン・ジャーナル・オブ・ソシオロジーはこれらの専門雑誌の専門分野を侵食することなく、連合した人々の活動を全体として秩序立てて捉える見方を進展させる研究についての、学者たちの思考を交換するためのメディアとなるであろう。この専門雑誌では多数のアメリカ人の学者と多くの代表的なヨーロッパの社会学者が、発見可能な社会的関係の原理について、最良の考えを発表するであろう。そして彼らは市民の権利と義務についての最も開かれた視野をとることにより、全ての知性ある人々の助けとなるであろう。

したがってこの雑誌はまず第一に専門的なものとなるだろう。この雑誌は社会の中の人々の関係に関する知識を、社会学へと組織するためのものになるであろう。それにより社会学はアメリカで最良の学問を代表するものとなる。他方この雑誌は、社会学を普通の生活で用いられる言葉へと移しかえようと試みることで、化石化し時代遅れとなった事柄を、ただ分類したり説明したりするものであると思われるにすむであろう。今巻の内容が示すとおり、科学的ひいては専門的な性質をもつ思考が、抽象的に規

則付けられた諸原理で作られているということは、本質的な問題であるとは考えられていない。逆に科学の目的とは、慣れ親しんだものごとの意味を明らかにすることであり、科学そのものための王国を築くことではない。こうした王国では、慣れ親しんだものごとを仮に見いだせたとしても、人工的な表現のもつ不可視な様相のもとに隠されてしまう。もし社会学が実践的な人々の間に何らかの影響をもたらすものであろうとするなら、普通の人々が興味を引くような知見を、実務家たちにとって真実の生であると思わせるような形式にしなければならない。この形式は理論家ではなく実務家自身が、自らに関係する事柄を見るときにしばしば用いるものである。それゆえに実務家たちとは、最も信頼すべき社会学者なのである。どんな人々の営みに関する主題も、それが複雑な人々の営みとの関係が明白となるように扱われるなら、社会学が注目するものとなる。

シカゴ大学の社会学部のスタッフがこの雑誌の責任編集をしている間は、最大限に多様化された情報源から、社会哲学の材料を拾い集めてくる男女が、寄稿者となるであろう。その内容は方法論についての議論から社会改良のためのプランやごく小さな社会集団や特定の意義深い社会状態・過程・機能についての記述などに至るまで、多岐に渡るものとなるであろう。この雑誌は、自らの思考をそのページに著したいと望む信頼のおける社会学者のための「機関誌」であるという、正にその意味で、編集者たちの機関誌となるであろう。この雑誌の基盤となる考え方は、単純に以下のとおりである。すなわち、私たちは社会的有用性について、現在もっている英知をより豊富なものとすることができる、それにより今まで組織されたものよりもはるかに効果的な、包括的福祉を促進する組み合わせを作ることができるのである。したがって、様々な目的を決め、そしてより合理的に関連する成果をおさめる手段を発見することについて助けとなる人たちが求められている。

社会改良のための特定の計画を取り扱うさい、それらの計画がもつ目的は、目先のものではなく予想しうる最もかけ離れた結末により、計画との関連性を説明するものでなくてはならない。計画は、一時的な価値により評価されてはならず、または直接に影響の及ぶ人たちが満足するかどうかを至上の評価基準としてはならない。そうではなく、計画が社会のタイプや傾向にたいして及ぼすことになる変化の性質により評価しなくてはならないのである。

多くの有能な読者にとり、この雑誌の方針についての最も重要な問題は「キリスト教社会学」にたいする態度であろう。それにたいする答えを簡単に言えば、私たちは敬虔なる態度でキリスト者の社会学へと向かうのであり、徹底的に懐疑的な「キリスト教社会学者」になるのである。

編集者たちは以上のような基盤の上に、アメリカン・ジャーナル・オブ・ソシオロジーを、未熟な社会学的意見を抑制する管理人、公正かつ適正な社会哲学の発展を促進する道具、さらに人間の善意を保証しようとする賢明な努力の支援と強化の原理としたいのである。